

追悼の辞

上智大学名誉教授

安斎伸

(一九二三～一九九八)

ヤン・スィングドー
Jan SWYNGEDOUW

1998 年の元日に安斎先生が亡くなられたとの知らせが伝わったとき、先生を存じ上げる者は誰も皆ひどく驚きただ呆然とするばかりでした。突然のご逝去の数日前にも、先生は京都で開かれたコルモス（「現代社会における宗教の役割研究会」）の年次会議にお元気に出席されていたらしいです。いつもと同じくその会議においても、安斎先生は先生ならではの絶妙な組み合わせで、学究的な洞察と穏やかな温かさを、ともにお示しになっていらしかったのです。安斎先生が日本の学界、並びに宗教界においてひときわ傑出した存在でいらしたのは、まさにこの特別な天賦の才によってでありました。そうした資質によって先生は出席された多くの会議を成功に導き、さらには消えることのない印象を先生と出会った人々の心に刻み込んだのです。

安斎伸教授は 1923 年に仙台でお生まれになりました。東京大学で宗教学、上智大学で哲学を学ばれた後、渡欧し、1961 年には国立ウィーン大学より宗教社会学の分野で博士号を取得されました。帰国後、先生は上智大学の社会学の教授となられ、定年までお務めになりました。先生が学問の上でご関心をよせられたテーマは主として二つあります。一つは宗教教育の問題です。安斎教授はその分野における学識を、専門会議の開催、およびキリスト教関連のさまざまな雑誌類へのご寄稿を通じて、とりわけご自身が所属されていたカトリック教会のために発揮されました。安斎先生が研究者としての生涯を通じて追究し続けた二つ目のテーマは、奄美諸島をはじめとする日本の南方の島々におけるキリスト教の布教伝道に関する社会学的分

析でした。現地調査を行うために、先生は学生たちとともに定期的にそれらの地域を訪問されました。もっとも、先生のご高名はこれらの学問上の業績にもまして、さまざまな宗教に所属する人々が 宗教の研究者とともに 一同に会する会合の場において先生がなされた、数々の具体的な活動によって広まったのでした。この点で私どもは、「世界宗教者平和会議」ならびに「現代社会における宗教の役割研究会」で先生が果たされた大きな役割を忘れるわけにはまいりません。

宗教社会学の領域における学術的な執筆活動に加えて、特に晩年の安齋教授は広汎な話題に関して数多くの簡潔なご論考を執筆なさいました。匿名で発表されたものであっても たとえば仏教系の新聞『中外日報』で先生が担当された「社説」のように 読者は先生がお書きになったのではないかと容易に推し量ることができたことでしょう。それは単に明晰さにおいて抜きん出た先生の著述のスタイルによるばかりでなく、深いキリスト教信仰に根ざした先生の人類愛と人間性への希望とを、その文面に感ずることができたからでもあります。ご逝去の一年前に、それらのご論考の多くは『21世紀に向けた私のテストメント 現代の宗教と社会のための展望と提言』という表題のもと、一冊のご著作としてまとめられております。

安齋教授は南山宗教文化研究所の草創期より、しばしば私どものもとに足をお運びくださいました。研究所員たちが寄宿するホームであるパウルス・ハイムの、「名誉家族」という（非公式の）称号さえ私どもは先生にお贈りしたものです。それは頻繁にご訪問くださったというだけでなく、いつでも安齋先生の存在が生きる証しとして、次のこと

を思い起こさせてくださったからであります。すなわち学問と諸宗教対話は、先生が御身をもってお示しくださったように、人間の心からの温かさを伴って実践されるときに初めて実を結ぶことが可能になるのです。

実際、この点で先生は、いかなる場合であっても、師であられました。学問の場における出会いということでは、国の内外を問わず たとえば日本宗教学会の毎年の学術大会であろうと、国際宗教社会学会の隔年の会議であろうと 先生のご発言は、研究の深さとともにとりわけ人間味あふれるその研究方法を明らかにするものでありました。これはさらに、先生の諸宗教対話の実践において際立った点でもあります。

そうした課題に深く関わった一人の日本人カトリックとして、安齋先生はまったく「傑出」していらっしゃいました。もっとも、誰もが先生のように心を開くことに熱心だったわけでは必ずしもないということは、公平を期するために述べておかなければなりません。特にキリスト教徒にはそういう傾向があり、そのなかで先生が示された非キリスト教世界に対する開かれた態度は比類のないものだったのです。ひょっとするとそれほどまでに心を開くことは、先生の「余裕」から可能になったのではないのでしょうか？ 実際、先生のキリスト教信仰は、同時に先生ご自身の日本文化への深い造詣とも調和したものでしたが、その共生が長年にわたる常ならぬ努力を経て初めて得られたものであったことはおそらく疑いありません。諸宗教対話の分野においてもまた、先生は国の内外においてご活躍でいらっしゃいました。先生が南山宗教文化研究所におけるシンポジウムに、ある時はパネリストとして、またあ

る時はオブザーバーとして参加してください。さったことは、私どもにとってたいへんありがたいことでありました。その上、宗教間、文化間の相互理解を促進する上で先生が果たされた数多くの貢献は、海外の人々からもまた高い評価と敬意が寄せられたものでした。たとえばいくつかの会合の後で、先生が和服を纏って人々を日本の歌と踊りでもてなした時に、いったい誰が世界は皆兄弟だというメッセージに捕らえられずにいられたことでしょうか？

おそらく安齋教授の思い出を懐かしむ最良の方法は、涙を流しながらも祈りのことばを唱えることでありましょう。私どもは安齋先生を、先生の学問上のご助言を、温かい友情を、出会ったあらゆる人々への先生の真心

こもったお心づかいを惜しむことになりました。しかしながら私どもが先生のお顔や振る舞い、歩き方や話し方、苦難に遭っても先生が示された人生の楽しみ方を思い起こすとき、その涙や祈りとともに微笑みが浮かぶことでしょう。苦痛に襲われるときであっても、先生ご自身は人生をいかに楽しみ、その喜びを人々といかにして分かち合うかをご存知でいらっしゃるに違いないと思います。それと同じく今も先生は、永遠の至福を享受されているに違いありません。なぜならそのための方法をご存知なのは、ただ先生だけなのですから。

ヤン・スィングドー
南山大学名誉教授
(訳・奥山倫明)